

# 架構と境界による設計手法に関する研究：建築の骨格論へ向けて

古森, 弘一

<https://hdl.handle.net/2324/4784636>

---

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏名	古森 弘一		
論文名	架構と境界による設計手法に関する研究 ～建築の骨格論へ向けて～		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 田上 健一
	副査	九州大学	教授 鵜飼 哲矢
	副査	九州大学	准教授 井上 朝雄

### 論文審査の結果の要旨

建築家が設計を進める過程においては、形態は建築家自身の建築的理念に基づく一つの枠組みとして提示されることが多い。その形態の決定には、建築家が有する固有の概念や専門知が投影されるが、同時に形態と形式との関係の抽象化が設計手法として試行される。本論は、実現した建築作品の分析と評価をとおした形態と形式との関係の抽象化、すなわち設計手法の提示とその普遍化へ向けた一試論である。

第1章では、研究の背景と目的を述べている。「架構と境界による設計手法」の有効性と応用可能性を示し、さらに「建築の骨格論」へ向けた成立条件を明らかにすることを目的としている。

第2章では、設計手法として「架構」と「境界」に着目する論拠と、建築の骨格論としての試論可能性について述べている。

第3章では、「架構」について考察している。「架構」の構成要素として「構造的架構」と「構法的架構」を示し、それぞれの要素特性と意味論的選択性に言及した。

第4章では、「境界」について考察している。「境界」の構成要素として「社会環境との境界」と「自然環境との境界」を示し、それぞれの要素特性と意味論的選択性に言及した。

第5章では、実現した建築作品について、「架構（構造的手法）」「架構（構法的手法）」「境界（社会環境的手法）」「境界（自然環境的手法）」により分類分析し、傾向を表象化した。

第6章では、「架構（構造的手法）」「架構（構法的手法）」「境界（社会環境的手法）」「境界（自然環境的手法）」それぞれの具現化・具体化の詳細について述べている。その上で、4構成要素を統合し、設計手法としての条件となる「建築の骨格」が、形態と形式との関係を抽象化させる、またそれを想起させ得る重要な喚起語となることを確認している。

第7章では、一試論として、「建築の骨格」による設計手法の普遍化について述べている。

本研究で得られた建築設計手法に関する知見は、建築設計の論理化、自立発展に大きく寄与すると考えられる。よって本論文は博士（芸術工学）の学位論文として合格と認められる。